

われわれ日本人はビジネスや研究などで世界中に展開しているというものの、日本の国土での活動を切り離しては生きていけないことは事実である。三八万平方キロメートルという狭くて細長く、可住地が西欧諸国などと比べると極めて少なく、広域的に、一体的に利用するには相当に使いにくい孤立した国土を預かってしまったわれわれは、国土に手入れし国土から恵みをいただく努力を、西欧諸国以上に行うことでしか生きていく方法がないのである。

二〇二四年の正月に能登半島を襲った地震は、予想をはるかに超える桁違いとでもいうべき災害を半島全体に残していった。海岸隆起の規模は数千年ぶりというものだったとの地震学者の見解が示されているが、また、このような規模の地震は東海地方や東京などでもあり得るとの見方もあり、災害大国、なかでも地震大国に住む覚悟が問われている。

ということとは、今回の能登半島地震、以前の熊本地震、東日本大震災、阪神淡路大震災、さらに一〇〇

風呂・トイレコンテナ二二六棟、野外キッチン一〇七個が準備されたと報告されている。

能登半島が狭い半島で、道路が寸断されていたというものの、日本政府の対応はイタリア政府と違いすぎるのではないか。

被災者の体育館での避難生活は、①災害避難用でも宿泊用の施設でもないこと、②一人あたりの面積が狭いこと（熊本では一人に一畳しかなかった例もある）、③大人数で騒音や混在感があり、落ち着かないこと（プライバシーが保てない）、④一人用のベッドがないこと、⑤入浴施設がないこと、⑥調理施設がなく温かい料理が提供されないこと、⑦医務室も治療施設もないことなどの問題が指摘されている。

これらのことは、体育館用に設計された建物を避難所として利用しているのだから当然のことなのだ。なぜ、この世界に冠たる災害大国の政治が政府を動かして、日本中の体育館について上記の七項目改築を始めないのだろう。

難民のための避難所基準である

K a g e n
J o u y o

下
言
上
用

改めて大災害 国に暮らす覚悟

国土学アナリスト 大石 久和 Hisakazu Ohishi

年前の関東大震災クラスの地震が「日本列島のどこを、いつ襲うかわからない」状況下に生きているということなのだ。つまり、この国ではそれへの備えが普段から欠かせない最優先の思考事項であり、政策項目なのである。

そこで、今回特に問題にしたいのは避難所のあり方である。先に示したように、日本のどこでも誰でもが、避難所暮らしをしなければならぬ災害被災状況に遭遇する可能性がある。能登半島地震でも悲惨な避難所暮らしの様子が明らかになったが、この悲惨さはほとんど一〇〇年前と変わっていないのだ。

驚くべきことに今回の能登半島での避難所生活環境は「戦前の災害時の避難所状況とまったく同じだった」のだ。この一〇〇年何の「進歩も進化も」していない。プライバシーが尊重されなければならぬ時代だというのに、未だに世帯ごとの仕切りもなく、窮屈でベッドもない生活を余儀なくされているのは、まったくおかしいのだ。

政治は、これでは進歩がないと認

「スフィア基準」を紹介したこともあるが、これは国際赤十字などが二〇年前に提案したもので、①一人あたり最低三・五平方メートルを確保すること、②トイレは二〇人に一つは設置し、それは男女別で、女性用は男性用の三倍あること、③世帯ごとに覆いのある空間を確保し、温度管理、換気が確保されていることなどとなっている。

自国民のための避難所基準が、この国際赤十字基準を大きく下回っていて、そして、今回も熊本地震時と同様の悲惨な避難所暮らしを自国民が強要されているのに、ほとんど国会で議論もされないし、試行的な試みをしようとしなないというのはどういふことなのか。本来なら通常時には、サテライト・オフィスなどに利用できる避難所を五カ年計画でも立てて全国に整備し始める必要があるのだ。

ところで、米山隆一衆議院議員（元新潟県知事）は「今回の復興では、人口が減り、地震前から維持が困難になっていた集落では、復興ではなく移住を選択することをきち

識しなければならぬ義務がある。国家・政府は一国の最大にして最終の保険機関なのだが、日本政治にその認識と覚悟はあるのだろうか。

二〇〇九年一月から四月にかけてイタリアでラクイラ地震と呼ばれた群発地震が発生した。この地震では三〇〇人が死亡し六三、〇〇〇人が家を喪失した。驚くべきは、イタリア政府の動きである。

政府は四八時間以内に、六人用テント三、〇〇〇個、つまり一八、〇〇〇人分のテントを用意したが、最終的に六、〇〇〇個のテントを供給した。このテントは約一〇畳分の大きさで、エアコンが付き、お風呂、トイレのコンテナも設置できるものであったというのだ。

実際はテントへは二八、〇〇〇人が収容されたのだが、それは三四、〇〇〇人が宿代なしでホテルへ避難できたからであった。その他に、通常ベッド四四、八〇〇個、折りたたみベッド九、八〇〇個、シーツ枕五五、〇〇〇点、毛布一〇七、二〇〇枚が準備されたのだった。その他に、発電設備や発電機一五四機、お

んと組織的に行うべきだと思えます。」と述べているが、これは議論の方向が逆で、災害による国難を惹起する可能性が高い東京・首都圏一極集中を是認し加速する感覚だと考える。

能登半島の数千年ぶりという大地震では、上下水道・道路などのインフラや住宅やオフィスが壊滅的な被害を受けてしまった。交通の主力が陸上となっている現代では、小さな半島はそれだけでも大きなハンディを背負っているために、過疎化と高齢化が他地域と比較しても著しく進んでしまっていた地域を大地震が襲ったのだった。

わが世代の都合で、この国の寸土といえども荒廃させる自由などありはしない。それは国民一人一人を大切にしなければならぬことと同意味なのだ。「かつて北前船で繁栄した輪島とか七尾とかがありましたね」という昔話ではない。能登半島の町々は、そこで育まれてきた歴史や伝統技術と共に、われわれ現世代が未来に引き継ぐべき国民資産なのである。